

アレン・ネルソンさんの納骨式より

名古屋別院フォーラム人権連続講座

佐野明弘さん述(07.7.7)

先生への質問

実際、これはさっきの私の私自身がどうしてそのことに決着がつかないくせに生き延びたかといいますと、本当にいのちを生きるということが矛盾でしょう。

もう耐え切れないところで、真宗の教えにあつてよるこんだのだけれども、やっぱりそのことが解決しなかった。なぜ他の生きるものいのちをとってまで生きなければならぬのか。どう考えたら良いのだ。

それで大きな会のように、私の先生に滅多に質問をしませんでしたけれども、どうしてもという思いで、手を挙げてお聞きしたので。「他のもののいのちをとってしか生きられない、そのことをどうお考えですか？どうそのことを受け止めておられますか？」こう聞いたのです。

それまでに、他の方にもたくさん聞いたのです。そうすると色々な外道を教えてくれたのですけれども、先生に聞いたら、先生はこうおっしゃったのです。

その質問はやはり厳しい質問ですよ。これは、そう簡単に答えられる質問ではないですよ。

先生はどうお考えになりますかと聞いたら、「言い訳もせず、誤魔化しもせず、正当化もせず、開き直りもせず、諦めもせずや」とこれだけで黙られた。

私にはそれで十分だったのです。頭がガンと殴られたような気持ちになりました。どうにかして助かるうと思つて、うまい決着をつけて楽になりたかったという、私のそういう計らい、それが止んだのです。これは、生涯抱えていくしかない、諦めもせずと。

順番もちゃんとなつていっています。まず、言い訳もせずや、言い訳が通らないと、次は誤魔化すでしょう？誤魔化しもせず。そうでなければ、正当化するのはです。正当化がうまくいかないと、開き直るのです。「食べなければ死んでしまうではないか」などと言つて開き直る。それで考えても分からなかったら、諦めるでしょう？だから諦めもせず。

出発点に帰る

それは、こういう私たちに出発点を与えるのです。我々はすぐに帰着点だけを求めるのです。どんな問題にしてもそうです。環境問題でも差別の問題でも人権の問題でも、帰着点だけを求めているのです。大事なのは出発点です。アメリカへ行き平和団体にいくつかお会いしたときに、非常にもろいことが書いてあった。壁のところを外側にでっかく、

There is no way to Peace.

Peace is the way.

(平和への道はない。平和が道なのだ。)

「ちよつとこれはなかなかだなあ」と思つて感動しましたね。

「平和への道はない」、平和を求める心がないので戦争しているのではないのだ。皆平和を

求めて殺し合っているのです。求めている平和が違ふのです。

これは国家間だけではない、家族の間でもそうでしょう？夫婦でも子どもの教育に関して皆喧嘩するのです。それぞれ、そっちのほうが良いと思つている、ちゃんとした正義を持つていっているのです。「その方が家庭内が平和になる」と思つていっているのです。平和によつて皆殺しあう喧嘩するのです。

だから、「平和への道はない」、やればやるほどややこしい。「平和への道はない。平和が道なのだ」というのです。これはおもしろいですが、出発点なのです。

これはびつたり言葉をかえて、今度別院にも張つておいてもらいたいのですけれども、「念仏への道はないのです、念仏が道なのです」、これほど大事なことです。

私たちは帰着点ばかり求めている、帰る到達点、そうではない。出所・出発点、あるいは、帰るところ、そこから出発する・帰るところ、それを「原点」と言いますでしょう？それが大事なことです。

如来の悲しみ

私たちの思いより深いところに、出遇わずにはならないような厳肅なものが働いているわけです。仏教を一言で言うと、「悲」という「悲しい」という一字でおさえられます。親鸞聖人も「悲願」と言われた。この「悲しみ」という一点が、人と人が通じていく一点でしょう。